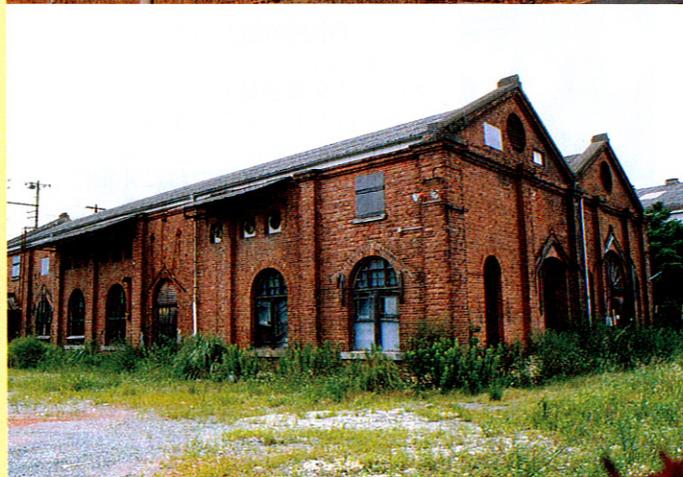


# ARIAKE KOSEN 図書館報

Vol.5  
1999.Dec

## 特集

思いがけない出会い  
図書館雑誌コーナー



表紙写真（撮影／建築学科 松岡高弘）

★右上：旧宮原坑

★右下：旧万田坑

★左上：旧宮浦坑

★左下：旧三川電鉄変電所

### 目次

#### ■特集：思いがけない出会い

図書館雑誌コーナー……………2～5

一般誌……………2～3

専門誌……………4～5

#### ■読書感想文コンクール……………6～12

入賞者……………6

入賞作品紹介……………7～11

審査を終えて……………12

スタッフ紹介……………12

#### ■図書館この一年……………13

#### ■図書館統計……………14～15

#### ■郷土の文化財・編集後記……………16

# 特集 思いがけない出会い：図書館雑誌コーナー

図書館では、娯楽・教養分野から専門分野にいたるまで、さまざまな分野の多くの雑誌を購入しています。皆さんがまだ読んだことがない雑誌や、難しそうだからと敬遠している雑誌もあるのではないのでしょうか。そこで、本特集では多くの雑誌に親しんでもらうために、図書館の雑誌の紹介を行います。それぞれの分野の雑誌に詳しい教職員に、雑誌への思いや紹介を書いていただきました。この特集を参考に雑誌の世界を覗いてみましょう。思いがけない出会いがあるかもしれません。

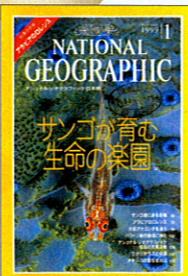
## 音楽



学生のころクラシック音楽に夢中だった私は、アルバイトで稼いだお金のほとんどを楽譜と演奏会とLPレコードとCDにあてていた。CDは、出はじめのころで、ずいぶん高価だった。レンタルなんか普及してないから、1枚買うのにも、あれこれ雑誌を読んで慎重に選び、飽きもせずそれを繰り返し聴いたものだ。当然、FM放送の世話にもなった。興味のある曲目をかたっぱしから録音するためである。そのころ集めたカセットテープを今聴くことは全くない。だけど、それらの演奏は私の細胞の一つ一つにしみこみ、単なる「好き嫌い」を超えた審美眼ならぬ審美耳を育ててくれたような気がする。

本校図書館の雑誌コーナーにある「音楽の友」「レコード芸術」「FM fan」(写真)は当時私が欠かさず目を通していたもので、ある意味で私の青春時代の恩師と言えるものなのかもしれない。(一般教育科 M)

## グラフ誌



雑誌コーナー一番右の黄色い雑誌が「ナショナルジオグラフィック日本語版」(写真)。日本語版の創刊は1994年ですが、英語版は100年以上の歴史を誇り、アメリカではどこの家庭でも本棚の一部はこの黄色で埋まっているといわれるほどポピュラーな雑誌です。この雑誌の最大の魅力は写真。人と自然に関わるあらゆる分野を、写真を使ってわれわれの前に明らかにしてくれるのがこの雑誌です。

「太陽」は1963年創刊のグラフ雑誌。毎月ひとつのテーマを取り上げ、美しい写真を中心に構成される記事は「ひとつ上の暮らし」を紹介してくれます。食器、レストラン、建物、芸術品。どれをとってもナルホドと思う、眺めるだけで心のゆとりを感じさせてくれる雑誌です。(一般教育科 Y)

## 芸術



「キネマ旬報」(写真)映画は映画館で見るのが本来です。せっかく映画館に行くのなら良い作品を見たいものです。そんなとき役立つのが「キネマ旬報」です。本誌は月に2回発行されているため、きわめて新しい情報を得ることができます。本誌の情報を手がかりにして、月に1回くらいは、映画館へ行くのもおしゃれな生き方だと思いますよ。

「芸術新潮」には第一級の美術品や工芸品などの写真がきれいなカラーで満載されています。本誌をばらばらとぞくだけでも、いつのまにか目がこえてきて、趣味が良くなり、服を選ぶときや、靴を選ぶときにも役立つような気がします。何にしても一流のものを目にすることは君たちの美意識を高めてくれること受け合いです。

「アサヒグラフ」は1週間の出来事をコンパクトにまとめて写真で見せる雑誌です。新聞では顔が見えない、テレビは一瞬で全体を見逃しやすい。それらの欠点を補っているのがグラフ雑誌です。「アサヒグラフ」を毎週見るようにして、世の中の動きに強くなろう。就職試験などでも役立つかもしれませんよ。(一般教育科 S)

## 文芸



「中央公論」と「文芸春秋」とは政治・経済・社会・文化一般についての時事的評論や随筆・創作などを総合的に扱う総合雑誌。歴史の古い「中央公論」はある新聞社に買収されなどして昔日の面影は無いが、「文芸春秋」の方は芥川賞による新人小説家の作品の掲載などで国民的な雑誌の一つになっている。独特の嗅覚でつねに非常にジャーナリスティックな話題を提供し続けている。そして広範囲の読者を獲得している点で大きな影響力を持ち、この雑誌に掲載されたひとつの論文が時の総理大臣を辞職に追い込んだほどである。

純文学の雑誌としては「群像」と「文芸」(写真)とがあるが、「文芸」の方は季刊で若い世代向きだと思える。純文学までは行かなくとも、小説や物語を楽しみたいと思う向きには「小説新潮」。最近、少々軟弱な面が見られるが、面白い記事も多い。「ギリシャ神話を知っていますか」の著者阿刀田高の「シェイクスピアを楽しむために」を現在連載中。ミステリーやSFを楽しみたい人には「SFマガジン」と「EQ」。残念なことに、「EQ」は現在休刊中である。(一般教育科 N)

生活関連



NHKで放映されている番組のテキストが「おしゃれ工房」と「きょうの料理」(写真)です。「おしゃれ工房」は、手芸やソーイングなどのハウツーや、ファッション、美容などの情報が満載です。手作り生活ですてきにしてくれます。

「きょうの料理」は、毎週、魅力あふれるテーマで毎日の献立に役立つ料理を、ていねいな作り方で紹介しています。家庭料理は、この1冊におまかせ。

「これはあなたの手帖です……。」という花森安治のことばで始まる「暮らしの手帖」は、生活向上のための厳正な商品テストあり、衣食住にまつわる記事ありと、いろんな生活の知恵が紹介されて、ちょっとした工夫が毎日の暮らしを、豊かに、愉しく、快適にしてくれることを教えてくれます。(図書館 M)

趣味



季節ごとの山の表情を美しい写真で紹介している「岳人」は、山の情報を満載した月刊誌です。毎月、写真と地図入りで各地の山の登山ルートが紹介され、また、紀行文や登山記録、山に関するエッセイ、山の本の紹介など多彩な内容で、ビギナーから本格派まで幅広い層に役立つ雑誌です。

毎号第一線で活躍する写真家の写真が掲載され、現代の写真の最前線を知ることができるのが「アサヒカメラ」。最新のカメラやレンズに関するメカニク的な記事も掲載され、メカに興味のある人も楽しめます。

「モーターファン」は1996年で休刊になり、現在は「モーターファン別冊」(写真)のみが不定期に刊行されています。毎月最近発売されたニューモデルを取り上げて、試乗レポートや性能についての記事、メカニズムについての解説などを掲載。開発を担当したエンジニア達へのインタビュー記事は、開発にまつわる裏話なども知ることができ、興味がつきません。(図書館 S)

自然科学



「SCIAS(サイアス)」は、「確実に知っている」という意味のエスペラント語「SCIAS」と同じ綴りです。本誌は、生物・環境問題・天体現象など身の回りで見られる自然現象をテーマにしたごく最近の傑作が数多く掲載されています。11月号では、特集で「犯罪という迷宮」と題し、核・生物・化学兵器で大量破壊が可能になったテクノロジーの最前線、現代科学が生み出す「犯罪」について、様々な観点からわかりやすく解説されています。

タイトルになっている「Newton」(写真)は、皆さんが物理で勉強した「運動の法則」を確立したイギリスの物理学者として有名です。本誌を開いてみると、

とにかくその色鮮やかなすばらしい写真やリアルな画像に魅入ってしまいます。宇宙のようなとてもスケールの大きい世界から細胞のようなミクロの世界まで幅広く取り扱っており、普段の物理や化学の授業では、見たり聞いたりすることが出来ない興味深い現象を数多く見ることができます。

「科学」は、宇宙や地球環境などのテーマを中心とした最先端の研究報告が数多く掲載されています。10月号には、「X線でみる新しい宇宙」や「宇宙の天気とは何か」と題して、X線天体望遠鏡「あすか」による超新星残骸の写真やスペースシャトル「ディスカバリー」から撮ったオーロラと地球の写真なども掲載されています。(一般教育科 S)

外国語



「CNN English Express」(写真)はすべての記事が日本語と英語で並んでいます。つまりどっちを読んでもよし。「使える」英語雑誌と銘打つように会話で便利なフレーズ、最新映画の粋な場面が使われるセリフなど英語を使ういろいろな地域・分野の話題を集めています。それぞれの英文が短い、どこを開いても読み始められる点は立ち読みも可。まずは手にとって。

有明高専の2年生以上の学生なら、誰もが勉強した経験のあるドイツ語。「基礎ドイツ語」ではドイツ語を学び始めた読者を対象にしています。まずは後半の「文化」の部分を開いてみましょう。ドイツの城、ワイン、ビール、料理など写真付きで紹介しています。

「日本語ジャーナル」は日本語を学ぶ外国人向けの雑誌です。ほとんどの漢字にふりがながつけられていますが、内容は大人向け。現代日本のいろいろな話題を取り上げていますから、日本人が読んでも十分楽しめる内容です。文法的な説明を読めば「外国語としての日本語」を再認識できます。(一般教育科 Y)

一般科目関連



「パリティ」(写真)高専で学ぶ物理は今世紀初頭までに得られた結果であり、現在の物理について知る機会は限られている。この雑誌にはPhysics Todayの日本語訳論文を含む一流の物理学者による論文・解説が掲載されており、最新の物理に触れることができる。図・写真等も多数使われているので、是非手に取って見て欲しい。

きっと物理に対するイメージ(力・斜方投射・運動量保存…)が変わるでしょう。

「数学セミナー」 「正の整数nをとり、これが奇数なら3倍して1をたす。偶数なら2で割る。これを繰り返すとはじめにどんな数を選んで、いつかは1→4→2→1を繰り返す。」というコラッツの問題と呼ばれているものがある。小学生でも十分理解できる問題ではあるが、未だ証明されていません。また、一筆書きや折り紙の数学もあります。授業ではお目にかかれぬような数学がたくさんあります。より広い数学の世界への第1歩がこの雑誌です。(一般教育科 M)

## 機械工学科



「ロボコンマガジン」(写真) 昨年12月発行された新しい雑誌で、その名のとおりロボットコンテストに関する記事が主になっています。機械のメカを簡単なやり方で実現できる方法とか、電気・電子回路や必要なパーツといったものがわかりやすく解説されています。自分でロボットをつくってみたいと思っている人は必読の雑誌です。

「自動車工学」車の記事で満載なのは間違いないが、「工学」と名がついているように、「形」「姿」の話ではなく、エンジンの整備などが主な話題となっています。

「機械と工具」、「ツールエンジニア」機械の製造を担当する人に向けての雑誌ですが、機械工学科の学生諸君は工作実習である程度の基礎ができていますので、この雑誌でさらに新しい知識を身に付けて欲しい。

「ツールエンジニア」の中の連載「WAKUさんにきく」は現場でよく起こる事柄についてわかりやすく解説されています。

「機械設計」機械全般の設計に関する改善例などが掲載されています。特集などを見てみると今のようなことが問題になっているのか分かります。

「機械の研究」機械に関する連載講座と解説・研究論文からなっています。

「オートメーション」工場の自動化などに関する記事が載っています。

「計測と制御」計測自動制御学会の発行している解説と事例紹介を主にした雑誌です。(機械工学科 T)



「Bit」コンピュータの仕組みを知ろうとする場合、bitという言葉必ず目にします。bitとは情報量を表す最小の単位であり、1bitは0と1の2つの情報しか表せません。しかし、ここに紹介するコンピュータサイエンス誌「bit」は、名前とは裏腹に、たくさんの情報量を持つ雑誌です。「bit」の内容は主に、ソフトウェア、インターネット、マルチメディアなどの情報技術の説明や、注目をあびている最新技術の紹介です。しかし、それだけではありません。「サッカーと情報学」や「F1マシンの技術を支えるコンピュータ技術」といった私たちの身近な話題と情報技術との関連話や、世界中のプログラミングコンテストやコンピュータ音楽コンテストなどのレポートも載っています。また、「コンピュータ将棋選手権」や「コンピュータがオセロの世界チャンピオンも破る」といった話題もあります。「bit」の内容は比較的高度ですので、低学年の学生諸君が読むには難しいと思います。しかし、将来ソフトウェア開発者や情報系の研究者を目指す学生には、高学年になったら読んでほしい雑誌です。

(電子情報工学科 Y)

「C マガジン」(写真) 名前のとおり、プログラミング言語「C」についての雑誌です。「C」を学びつつある初心者を対象とした入門的な記事から高度な応用技術に関する記事にいたるまで、幅の広い内容が盛り込まれています。最新技術の紹介もあります。アカデミック(学問的)な特集が組まれることもあります。いくつかの記事においては、対象としている技術を可能とする基礎理論について詳しく述べられており、内容が高度です。プログラミング、プログラミング環境、およびそれらに関連した最新技術、そしてそれを実現する仕組みについて興味がある人は読んでみてはいかがでしょうか。やはり、難しいかな?(実は、私にとっても、大変むづかしゅうございます。)

(電子情報工学科 M)

## 電気工学科・電子情報工学科



「ラジオの製作」ハム、オーディオ、エレクトロニクス、短波関係の理論と製作を初歩からわかりやすく解説した入門誌。

「電波受験界」通信士、技術士受験のための指導雑誌。無線従事者国家試験問題の速報、解説と、受験直前の対策及び電波界の新技术の解説が行われている。

「工事と受験」第一種及び第二種電気工事士試験受験のための雑誌。電気工事に関することがらをわかりやすく解説している。

「トランジスタ技術」ICやマイコンを中心としたエレクトロニクス技術を詳細に解説している。実際の製作記事も豊富。

「合格情報処理」(写真) 情報処理技術者試験のための指導書。主に第二種を対象とし、半年で一通りの準備ができるようになっている。

「新電気」若い技術者を対象とし、電気技術全般を平易に解説している。学習と電検の指導誌。

「電子材料」エレクトロニクスの基本要素である部品と材料の専門誌。特に、ICやその他の半導体に関する最新技術が豊富。(電気工学科 O)

「インターフェース」この雑誌はコンピュータとその周辺機器とをつなぐ境界領域を主に取り扱っています。これが雑誌の名前の由来となっているかと思えます。内容は、ある分野の技術者が他の分野の技術者に自分の分野を紹介するような記事が中心です。つまり、この雑誌は技術者同士の「インターフェース」ともなっているわけです。将来、情報系の仕事につくことを考えている人はこの雑誌を眺めてみて下さい。内容を理解することは難しいかもしれませんが、しかし中に記載されている広告記事を眺めるだけでも現在、どういった技術が求められているのか感触がつかめるのではないのでしょうか。つまり、自分が将来やるべきことに関する感触です。

一昔前は、ハード系のコンピュータ技術者はデジタル回路に関する知識を持っているだけでやっていきました。ところが今のコンピュータ技術者はアナログ的な知識も必要とされるのです。つまり、コンピュータの動作速度が上がったので、今の技術者は単に電気的な接続を気にするだけでは十分ではなく、回路を伝わる信号を電磁波として取り扱わなければならないので

す。また、今のコンピュータ技術者にはハード系とソフト系両方の知識が必要とされます。現在の様々な種類の組み込み機器は高度なデジタル回路であり、通常はコンピュータとデータのやりとりをします。それゆえ、デバイスドライバやOS（オペレーティングシステム）についての知識がハードを設計する技術者にも求められます。こういったことが、この雑誌を眺めると実感できます。（電子情報工学科 M）

## 物質工学科



「化学」（写真）『特集』、『解説』、『連載』、『1999年の化学』などからなっており、化学分野の最先端を概観するのに役立ちます。この雑誌を読めば、先生方よりもある分野では化学の最先端については詳しくなるでしょう。『解説』は授業の参考になる記事もあります。連載には『研究室ようこそ』という記事があり、大学の化学系

研究室の実態も知ることができます。物質工学科4、5年生に勧めたい。

「現代化学」最先端の化学のいろいろな特集があり、「化学」と同様に化学分野の最先端を概観するのに役立ちますが、こちらは生命科学により重点をおいています。物質工学科4、5年生に勧めたい。

「化学と教育」特集、あんでな、講座、小中高のページ、論文などからなっています。全般的に難しいことをわかりやすく解説しています。特集、講座、小中高のページは1、2年生の化学の授業や実験の参考になると思います。1、2年生と物質工学科1～5年生に勧めたい。

「蛋白質・核酸・酵素」生化学・分子生物学研究および関連領域研究の現状を把握するのに役立ちます。物質工学科生物コース卒業研究の参考にもなると思います。物質工学科生物コースの学生に勧めたい。

「環境と公害」この雑誌は、自然科学・工学的な方面よりはむしろ社会科学的な方面からの広い意味の環境に関する雑誌です。編集委員の一人に、水俣病の研

究で有名な熊本大学医学部原田正純先生も含まれています。最近の内容の一部を列挙します。「気候変動とエネルギー問題」、「第4回アジア・太平洋NGO環境会議」、「異なる地球環境問題の政策的相互連関：代替フロンを事例として」。環境を理解するには社会科学の側面からの見方も重要だと思われるので、本校全学生に勧めたい。（物質工学科 M）

## 建築学科



「JJA」『新建築』の姉妹誌として、世界に日本の建築・文化・デザイン・技術を紹介する英文誌である。当初は月刊誌でしたが、1991年より和英併記の季刊紙となり、建築家およびテーマごとの特集と建築年鑑からなっている。和英併記ですから建築専門分野の英語力をつけるよい教材でもある。（建築学科 S）

「SD」はSpace Designの略で、訳すと空間デザインとなります。家具・インテリアデザインからストリートや都市デザインまでと対象は広く、日本ばかりでなく外国のプロジェクトも多く紹介され、芸術性の高い写真が特徴です。（建築学科 K）

「建築文化」（写真）はバラエティーに富んだ編集内容が魅力で、全編にわたって1つの話題作を取り上げたり、数多くの作品を紹介したり、テーマも様々である。また、作品の写真や記事も充実している。特に、コンペの特集コーナーでは、どのような基準で審査員が入賞作品を選定していったのか、その過程がよく解り、とても参考になる。（建築学科 M）

隔週発行の「日経アーキテクチャ」では、作品紹介の他、建築業界の最新の話柄が、豊富な実例や実務者のインタビューも交えて、具体的に分かりやすく解説されている。主に実務者向けだが、初学者にもとつきやすい。（建築学科 N）

いかがでしたか？この特集を片手に図書館雑誌コーナーにでかけてみましょう。何か必ず出会いがあるはず。ここに紹介した雑誌の他に、誌面の都合で紹介できなかった次のような雑誌もあります。実際に手にとって見てみましょう。

総合「サンデー毎日」「ダ・ヴィンチ」 趣味「ホリデーオート」「旅」  
社会「思想」「日本高専学会誌」「学術月報」「学校図書館」「国際交流」  
電気工学科／電子情報工学科「ASAHIパソコン」「I/O」「UNIXマガジン」「アスキー」

また、全国の高専や大学の理工系学部が発行する学術論文誌の紀要や研究報告もそろっています（研究閲覧室の壁際に置いています）。内容は専門の論文ばかりで少し難しいかもしれませんが、時には手にとって見てみるとよいでしょう。他高専の先生がどういう研究をしているかがわかり興味深いと思います。

この他に、出版社が出しているPR誌も有名作家による書評や連載エッセーなどが掲載され、小冊子といえども非常に充実した内容です。次のような各社のPR誌がそろっています。是非、一度読んでみてください。学習閲覧室の一般誌コーナーの横に置いています。

岩波書店「図書」 新潮社「波」 講談社「本」 文芸春秋「本の話」 筑摩書房「ちくま」  
角川書店「本の旅人」

# 校内読書感想文コンクール

この「校内読書感想文コンクール」という催しが復活してから五回目という節目を迎えました。年を経て隆盛の兆しが見えて来ていると言いたいところですが、今回の応募数は488編は、昨年の応募数540編を大きく下回りました。1年生190編（昨年195）、2年生188編（昨年163）、3年生102編（昨年123）、そして4・5年生は8編（昨年59）と、上級生の応募が激減したのが特徴と言えるでしょう。応募数の減少には様々な理由が挙げられそうですが、来年度は上級生が奮って応募してくれることを期待します。昨年度のコンクールでは3年生が書いた作品に目を見張らせるものが数多くあったのを思い出すからです。学年が上がってその後の専門の学科の勉強が進むにつれて、人間的にも成長し、読書生活にも深化が見られるはずですよ。

例年どおり、国語科の先生方の力添えを得て、そしてクラス担任の先生方全員の御協力のもとで第一次審査を行いました。第一次審査で選ばれて各クラスより推薦された作品を、後記12ページの7名の審

査委員の先生全員で30編の入選作品候補に絞り込み、そして最終選考で、ここに掲載されている最優秀作1編、優秀作3編、佳作6編を決定しました。どの作品をとっても力作ばかりですから、しっかり読み込んで今後の読書の際の参考にしてもらえば有難いと思います。なお、12月22日の全校集会の席上で校長先生より表彰があります。

本年度で第五回ですから、これまでに低学年の時に優秀な作品を書いた学生は随分います。複数回表彰を受けたという学生もいるはずですよ。こういう人たちが、4年生・5年生になってからも、多忙を厭わず、遠慮することなく、もう一度ここに応募してくればもっと充実した感想文コンクールになる、と思います。日頃の専門の勉強に追われながらも、専攻とは違った分野での全人的な読書に努めることによって、勉強の面ばかりでなく、精神的にも一回り成長した姿を見せてくれることが期待されます。上級生諸氏の奮起を望むところです。

（図書館長 中本 潔）

## 入賞者

### ■最優秀賞

建築学科 2年 山下 麻凡 伊豆の踊り子—幼き日の恋—

### ■優秀賞

建築学科 3年 前田 圭子 「夏の庭」 The Friends

物質工学科 3年 三浦 志穂 夏の庭

電気工学科 3年 福山 祐佳 「月と六ペンス」を読んで

### ■佳作

建築学科 1年 玉元 千裕 私の中の「少年H」

電子情報工学科 3年 松林美穂子 「こころ」を読んで

建築学科 3年 神谷晋太郎 「夏の庭」を読んで

建築学科 2年 西川 美耶 「ビルマの豎琴」を読んで

建築学科 5年 森木 史子 「木のいのち木のこころ(天)」  
を読んで

電子情報工学科 3年 松田 智恵 夏の庭

# 入賞作品紹介



## 伊豆の踊子 —幼き日の恋—

2年 建築学科  
山下 麻凡

二十歳の「私」は、この旅で、又ひと回り大きく成長したように思われた。伊豆への旅の引き金は、初めは自分に抱いた「嫌悪感」。しかし、途中そんな感情はどこへ行ってしまったのか。道中で出会った幼き娘、薫に、彼は実らぬ恋を経験した。まるで風のひと吹きのような儚い思い…。「私」と薫が、どのような関係を築くわけでもなく、時は無情に過ぎ去って行った。こんな“見詰めるだけの恋”が、彼を大人への階段へと押し上げて行く。そんな現代の若者とは何とも掛け離れた世界で繰り広げられている話だと私は強く感じたのだ。

薫は大人っぽく装った、しかしそれでいて、実の所まだ十四歳でしかない、幼い踊子であった。彼女は、他に女三人、男一人を引き連れて長旅をしている旅芸人の一行で、私は、この作品を、そんな女達を中心とした時代の背景とその心情とが、季節感を通して少しずつ微妙に、かつ慎重に描かれていると思った。そのため、情景描写も決して無理ない、純粹で清いものに感じられ、その時々的人物の移りゆく心情が、気持ち良い程に滲み出ている事を、読んでいて肌で感じる事が出来たのだ。



## 夏の庭 The Friends

3年 建築学科  
前田 圭子

あなたにとって「死」とは、どのようなものだろうか。呼吸をしなくなる。心臓が停止すること。永遠に眠り続けること。笑ったり、話したりできなくなる。そして、命ある限り必ずやってくるもの。私にとって「死」とはそういったものだった。

木山、河辺、山下という三人の男の子達は、小六の夏休みにひとりの老人を「観察」し始める。その老人が死ぬ瞬間を、その目で見るために。彼らにとって、はじめ「死」とはただ単に興味をそそられるだけのものだった。しかし、アサガオのような「観察物」にすぎなかった老人は、彼らの「友人」へと変化していく。何とも奇妙な友情の芽ええ方である。

彼らがおじいさんから学んだものは、どんなものだったのか。難しい漢字、戦争のこと、草花や果物の名前。それだけではない。何よりも、ものに対する考え方。おじいさんは、ああしろ、こう考えろとおしつけがましく教えたわけではない。彼ら三人は、おじいさんとの交流のなかで、自らそれを学びとっていくのである。悲しいかな彼らは、死ぬのを「観察」するはずだった人から、

今でも二つの場面が私の心の中に、印象深く根付いている。一つは薫が「私」にお茶を差し出す所。この時から彼女も「私」に好意を寄せていたのか。珍しい程のはにかみ様で、その愛らしい顔を真紅に染めながら、震える手をやっとの事で差し伸べると、お茶は見事に溢れてしまう。失敗により顔はさらに紅潮。「私」は終始あつげにとられその様子を見ていたが、文章からは、そんな彼女をも優しく包み込もうとする彼の温かさが浮き出たように思う。もう一つは、薫と「私」がお互いの長旅にピリオドを打つ所。いくら双方に別れたくない思いがあっても、旅に“別れ”は付きものなのだ。出発は秋の日の朝。冷風も心まで響くような強く厳しく吹き荒れる時だった。これだけでも直ぐに察せるであろう、「私」の気持ち。ここで描かれている情景は、全て「私」の心の中に潜む悲痛な思いだったのだ。唇を閉じ、じっと一方を見詰める薫…。文中では、その表情をひと言たりとも言い表してなかったが、私には彼女が流しても流しきれない、大粒の涙を力の限り、精一杯堪えていたように思われる。「さよなら」さえも言えない。踊子という職業柄、たくさんの男性を見て来たはずなのに、この「私」との淡い恋が初めての経験だったのだろう。汚れも何も存在しない。そこには、三人のただ透き通るように真直ぐな思いが、交錯しているだけだった…。一体、今の私にこの気持ちはあるのか。その答えをさがすべく、何度となくこの本を読み返している自分がある。何かが見つかる。そんな気持ちがしてならない『伊豆の踊子』は今私のたちにぴったりの作品だ。

これからの生き方を学んでしまったのだから…世の中何が起るかわからないな、と私は思った。

おじいさんの死。それは彼らが想像していたようなものではなかった。そこにあったものは、深い悲しみと憤り、それ以上に消えることのない疑問だったに違いない。いつか人は死ぬ、と頭では理解しているつもりでも、「なぜ今日死ななければならなかったのか」という問いに、納得のいく解答を用意することができないのだ。

もし私が死んだら、と考えて一番怖いのは、私がみんなにとっての過去の人となり、思い出となって、そして忘れられてしまうことである。そのときには人は、本当に「死ぬ」のだ。

三人はその後、それぞれ別の道を歩みはじめる。けれど彼らは、おじいさんを思い出の人にしてしまったわけではない。彼らにとって「死」とは、会えなくなるものでも、思い出となるものでもない。彼らは今でも、おじいさんと会って、話をする事ができる。彼らのなかに、おじいさんは生きているのだ。

人間は弱い。心に受けた傷をかかえたまま、前に進むことはできない。だから私たちはそれらを洗い流していく。けれどその傷跡は、心にしっかりと刻まれてゆくのだ。私はその傷跡を、大切にしたい。

おじいさんは喪われてしまった。けれど彼らは決して失われない傷跡を得たのである。

人の思い出のなかに生きるのではなく、その人と一緒に「今」を生きていけるような…そんなおじいさんのような「死人」に、私はなりたい。



## 夏の庭

3年 物質工学科  
三浦志穂

「一人暮らしの老人が、ある日突然死んでしまったら、どうなると思う？」死んでしまった人を見てみたいという好奇心から孤独な老人とつき合うようになった少年達が、やがて老人と心を通わせるようになり、お互いに人間の温かさを感じていく様子が感動的だった。

今、一人暮らしの老人は非常に増えてきている。私の親友も一人暮らしをしていたが、なんとなく寂しそうに見えることがあった。しかし、彼女には愛する家族がいたし、たくさん友人もいた。するべきことも、たくさん持っていた。寂しさを紛らわすものがあつたのだ。老人の一人暮らしは、そうはいかないと思う。家族とは遠く離れて暮らし、仕事もない。生きがいを失っている人が多い。この話の老人もそうだった。まさに「生ける屍」という感じさえ受けた。

「人は一人では生きられない」、この言葉は真実だと思う。実際には一人で生きることは可能だと思うが、人は生きがいを失くし、生きる喜びを持たないとき、生きているとは言えない。この一人暮らしの老人は、三人の少年達と出会い、再び生きることを始めることができた。

誰かのために生きる、ということ思い出せたのだろう。三人に観察されていることに気付いたこの老人は、急に元気になった。7月というのにコタツに入り、テレビばかり見て、コンビニのお弁当しか食べていないはずなのだが、三人にいたずらさえするようになった。頭にきた短気な河辺君は「お前がどんな死に方するか、絶対見てやるからな。」と、徹底的に観察し、尾行までするようになった。この少年の言葉は、可哀相な老人に対するものとしてはひどすぎるのではないかと、思う人も多いと思うが、私はかえってそこに、不器用な少年の精一杯の思いやりを感じた。「おじいさん生きて！」そう言っているように聞こえる。老人も三人の少年も本来の目的を忘れ、互いに心を通わせていく様子にはとても感動したが、そんな時、老人の死は突然やってきた。老人と少年達は、もはや他人ではなく、なくてはならぬ存在、親友のような関係だったために、少年達の悲しみは大きかったと思う。死んだ人を見てみたいと言う願いはかなったが、三人はそんな願いがどんなに残酷でばかげたことなのか分かっただろう。

しかし、三人が老人を長生きさせたことは確かだ。この話から改めて学んだことは、確かに人は人によって生かされる、ということだ。人は誰かのために何かをしてあげる時、愛している時、愛されている時、生きる意味を持っていると思う。

この夏、私はかけがえのない友を亡くした。彼女は私に生きる意味をたくさんくれた。心から感謝している。そんな彼女にどうしても聞きたい。「私はあなたに、生きる意味を教えてあげられたでしょうか。」



## 「月と六ペンス」 を読んで

3年 電気工学科  
福山祐佳

これは、一人の画家の話だった。後に世界的に有名になったチャールズ・ストリ克蘭ドは、もとはすごく普通の家庭を持つ平凡な男であった。それが突然妻子を捨ててロンドンを去り、そのまま二度と家には戻らなかった。普通、人は良心や世間の常識を完全に無視することなどできないと思うのだが彼にはそんなことは問題ではなかった。話の中で良心は自分の利益より社会の利益を先行させるとあつたが、成程確かにその通りかもしれない。なぜなら良心には常に社会全般に反しない精神が関わっていて、妙に偽善的に思えたからである。しかし、社会の秩序を保つのに法というルールがあるように人の内面での秩序を保つのに良心という感情は必要だと思う。厄介なのは良心は個人によって、その程度に差があるということだ。登場人物のストリ克蘭ドとストルーフェは対照的だった。人の良心にふれても何も感じないストリ克蘭ドに比べ、同じく画家で、他人の才能を見い出す事に優れた能力を持つストルーフェは心から善良な人間だった。彼はストリ克蘭ドの才能に誰よりも早く気づき、何度も裏切られながらも彼につくしたのだった。多くの人々はストルーフェは人が良すぎるし、ストリクラ

ンドは冷血漢だと感じるだろう。しかし、普通程度の善良さなど一体誰が決めるのだろうか。普通とは常に大衆を中心として考えられている。最近では社会から責められることを恐れ、社会に合わせて、個性までも無くしてしまっている人が多い。このような社会だからこそ個人の性格や良心を大事にすべきだと思う。それは協調性をなくすという意味ではなく、様々な個性を持った個々の人間としての人づき合いをするように努めるということである。

彼が今までの生活を捨ててしたことというのは、金儲けでも、外国で自由を楽しむことでもなく、極貧暮らしの中で絵を描くことだった。それが、彼の幸福だったからだ。この本から一番考えさせられたのは人の幸福についてである。金持ちになり、それなりの地位を得て、安定した生活を送る。それらは確かに魅力的である。しかしそれは万人にとって本当の幸福だと言えるだろうか。私たちはまだ自分にとって何が一番幸福になれる道なのかに気付いていない。誰もが示してくれるものではないし、もし気付いていても安定した生活を失うのを恐れて行動できないのがほとんどだろう。だが彼ははっきりとそれを感じ、そして行動した。周囲は彼を馬鹿だと思ったが彼自身が後悔することはなかった。結局幸せとはその人の生涯がその人によって成し遂げられた何かによって充実したものになる事なのだと思う。彼は幸福だった。だから人に感動を与える絵を残す事ができたのだろうか。彼の行動がどうであれ、読み終えて私は彼の中の天才めいた何かには強い憧れを感じてならなかった。

将来自分も、これが私の天職だと自身を持って言えるような仕事をしたいと強く思った。



## 「私の中の少年H」

1年 建築学科  
玉元 千裕

急激に変化していく話の展開に、私は息を飲んだ。そして、自分と少年とを、いつの間にか重ねていた。

主人公で、そして作者自身でもある少年Hは、私と同じ年頃で絵を描く事が好きな普通の子だと最初は感じた。しかし、読んでいく内に何かがずれている様な想いに駆られた。

例えば、Hの家の近くに住んでいた青年は兵隊になる事がどうしても嫌で、召集令状を無視して脱走して、最後には自分で首を吊って死んでしまったそうだ。しかも、Hはハエのたかったその死体の第一発見者となってしまう。

私はその出来事から初めて、これは作者自身の体験で、もう何十年も前の第二次世界大戦の頃の話である、という事に気付いた。つまり、作者は私の祖父母と同じ位の年齢なのだ。今はもう白髪だらけの頭の祖父母に、私と同じ年頃があったなんて、失礼だが夢みたいに昔の話で全く信じられない。今の私と同じ様に悩み、迷い、友達と会話していたのだろうか。しかし、今までのそんな考えを打ち破る位、この本の青春時代の話は鮮明であり作者はよっぽど子供の頃の思い出が強烈で忘れられないの

だろう、と思った。

母親がキリスト教信者で、「神は愛なり」と言う口癖がHはどうしても好きになれず家出もした。父親の弱さに腹が立ち傷付けてしまった自分を情けなく思い自殺を考えた事もあったそうだ。そんな場面を想像すると、あまりにも平和で、現代の生活と変わらない気がして、そんな時私は少年Hと同化する事が出来た。しかし、しばらく読んでいくと私はHの置かれている状況さえ想像できなくなってしまった。戦争の影がHの背後にも忍び寄っていたのである。そうとうHの住む町にも空襲が迫っていた。

Hの町と同じように私の地元、沖縄でも戦争による傷跡を幾つも抱えている。(忘勿石(わすれないうし))もその一つである。それは、疎開先の西表島に渡ってきた生徒や先生がマラリアという病気で次々と亡くなり、この状況を忘れてはならない、後世の人々に伝えたいという切実な想いを込めて海岸の岩に(忘勿石)という言葉が彫ったという話である。今では記念碑も建てられ大切に祀られている。その様な私が想像すらできない状況を体験し、乗り越えてきた現在の祖父母の幸せそうな笑顔を思い出し、私は改めて誇りに思った。

戦争という時代の中で私と同じ様な悩みを抱えながらも死んでしまった少年達の代表の様に、Hは私に生きているという実感を教えてくれた気がする。もう二度と起こしてはならない人類同士の争い。それを経験した人々の必死の願いのおかげで今の平和な世の中がある。私がここに居る。そして、今でもHは真実を語りかけている。私達の中の、少年Hに。



## 「こころ」を読んで

3年 電子情報工学科  
松林 美穂子

生きることも死ぬこともできない苦しみ、無力感。それが絶望であり、死に至る病なのだという。この『こころ』の中で、「先生」はまさに絶望によって死に至ったといえる。話には「私」が先生と出会い、先生の過去を遺書によって知るまでが描かれている。先生は昔、友人Kを裏切り、妻を手に入れた。それが原因でKは自殺し、罪の意識を抱え続けた先生は、真実を「私」だけに告白し自らも命を断つ。

Kが死に、先生は罪の意識という出口のない迷路の中で彷徨い続けた。妻のために死ねず、苦悩も打ち明けられない。客観的に見れば、それは先生に与えられた死よりもつらい当然の報いかもしれない。しかし、先生はそれを放棄した。苦しみから死への開放を求めるのは人として当然の権利であっても、先生がそれまで生に留まっていたのは夫人のためだけでなく、償いをしようというせめてもの罪滅ぼしのためでもあったと思う。

本来人間は自分に不都合なことから逃避したり、責任を転嫁することで自分を守ろうとする働きがある。これは自分が壊れてしまわないためにむしろ必要だ。しかし、

誠実な先生の本質は、そういったことを許せなかった。そのために残されたのは、死を選ぶという、生きるより楽であり、自己中心的でもある自我を守る最後の手段だけだったのだ。一方、夫人は実体のつかめない不安を常に抱えていた。夫の苦悩は自分のせいではないのか、と考えていた。

私は、一番不幸なのはこの夫人だと思った。先生は何も知らない方が幸せだと考えたようだが、必ずしもそうではないと思う。夫婦互いに支え合い、やっていきたいという願いと、自分を必要としつつも、時折突き放すような夫の態度。夫人は、自分の中の葛藤と、知りたくても知れない夫の心の中への懐疑という重たすぎる矛盾を背負ってしまった。そして夫の死により、その得体の知れない不安は一層増えたはずだ。

彼女には夫が必要だった。先生はそれを知っていたはずなのに、妻の苦しみに気付かなかった。いや、理解しようとしなかったのかもしれない。自分の罪はあくまで自分が背負っているもので、その苦しみを一人孤独に抱えているのだという自分への隣れみが心のどこかにあり、それが妻の苦しみを思いやる余裕を拒んだのではないだろうか。そういった点でも、先生は自己だけを救済したように思えるのだ。

人が生きていくためには、人とのつながりが、絆が、必要である。すれ違いや裏切りは時に絶望という影を私たちに落とす。それでも、互いに理解しようという努力を諦めないことで、こころの結び目を保てるのではないか。一歩ずつ生きてはいけないだろうか。私はそう思う。



## 「夏の庭」を読んで

3年 建築学科  
神谷 晋太郎

まずタイトルを見て爽やかな物語を想像していた。おそらく大半の人は輝く太陽や澄み渡った青空なんかを思い浮かべるだろうし、私も読後は爽快な気分になっていることだろうと考えていた。しかし読み始めて5ページたらずでそんな期待とは全く逆の方向へと話は進んでいった。

仲良し三人組の一人の祖母が亡くなり、そのことで人が「死ぬ」ということがどういうことなのかに興味を持ち、三人は一人の老人を「観察」し始めた。その老人が死ぬ瞬間を見るために。

私はこの物語を読んでいて、三年前に祖父が亡くなった時のことを思い出した。体に異変が起きた祖父を父と二人で風呂場から運び出したこと。救急車が来るのがとても長く感じられたこと。そして、助からなかったということを知られたときのこと。それらは今でもはっきりと思い出することができる。身近な人の死はそれが初めてではないのだけれど、このときの衝撃が一番強かった。もう二度とこんな体験はしたくないと思った。そうなのだ、人が死ぬことはとても辛いことなのだ。それなのになぜこの三人は人が死ぬ瞬間を見てみたいなどと言うの

だろうか。

私はこの本はタイトルとは似ても似つかないとても気味な話だと思いはじめていた。そして、三人の期待もますます高まっていった。ところが今にも死にそうだった老人は日ごと元気になっていった。なんと三人に死んだ振りまでして見せたのだった。そしてある日を境に「観察」は「交流」へと変わった。まるで昔からの友達のように仲良くなって行く三人と老人。しかしそんなとき突然老人は死んだ。まさかと思うようなときに。三人は死ぬところを見たいと思ったことをとても後悔したと思う。せつなく仲良くなれたのに。老人と仲良くならなければ、彼らは辛い思いをしなかったかもしれない。しかし、そうだったとしたら三人は、老人の死から何も得られぬまま後味の悪い結果に終わっただろう。もしかしたら老人はそこまで考えていたのではないだろうか。

こんなときに使う表現ではないけれど、彼らは良い経験をしたのだと思う。老人のおかげで人が「死ぬ」ということがどんなに重たく辛いことかを知ることができた。もう二度とあんな軽々しいことは言わないだろう。

最近、人や“自分”を簡単に殺してしまう事件が多い。「葬式に行くと笑ってしまう」と言う話も良く耳にする。たぶん命の大切さを知らない人が増えているからだと思う。これは世界レベルの問題だと思う。この難題が解決されたとしたら、そのとき戦争は終わるだろう。それは来年かもしれないし、最悪の場合やってこないかもしれない。はたして、私が生きているうちにそんな平和な世界を見ることができるとはだろうか。



## 「ビルマの豎琴」 を読んで

2年 建築学科  
西川 美耶

終戦記念日が近づくと、私は七年前に八十四歳で亡くなった祖父の事を思い出します。

私の祖父は、五十年前程、戦争でシベリアへ行き、ソ連の捕虜になり日本に帰還したそうです。私が、まだ幼い頃、祖父の手の親指がないのを不思議がって聞くと、戦争で前から後ろからと弾が飛んできて、その流れ弾にあたって指がなくなったのだと話してくれました。その時私は、戦争というものがどういうものなのか分かりませんでした。祖父の親指のないのを見て、なんと恐ろしいものなのかと思っていました。そういう戦争に対する思いから、私は、『ビルマの豎琴』を読みました。「ほんとうに、われわれはよく歌をうたいました。」という一節から始まるこの本を読んで、私は、戦争中なのに、なぜ歌をうたう暇があるのだろうかと思いに思いにひきこまれていきました。

しかし、歌をうたうことが、この戦争の中で重要なことだったとは、本を読むまで信じられませんでした。又、主人公の水島も、ビルマ人に似ているだけで、なぜビルマ人の格好をして豎琴を引かなければならなかったのか

も本を読むうちに少しずつ分かってきました。

この歌う隊は、歌を通してでしょうか、又、隊長の人物柄でしょうか、いつも一生懸命戦っているのです。それがよく伝わってきました。そして、隊長は、すごい人だと思いました。それは、皆を勇気づけるために歌を通して励まし、又、それを武器として戦い、最後まで望みを捨てませんでした。しかし、本を読んでいくうちに、色々な隊があり、戦い方の違いだけでなく、その隊の一番上に立つ人の考え方や人格によっても随分と下の人達に影響があったと思いました。

私は、この本を読んで、戦争の悲惨さや残酷さを学びました。しかし、それ以上に、人間の生き方について学んだように思います。それは、袈裟を着たビルマ人と、軍服を着た日本人との生き方の違いにあったと思います。

又、ある兵隊達の会話の中で、原子爆弾の話がありました。そして、「あんなあぶないものは、ビルマの坊さんにでもあずけておくのが一番いいだろう。」というところで、私はハッとしました。それは、この本は、祖父の頃の物語だと思っていたのが、本当は、現代においても同じことが言えるのだと思ったからです。現在、戦争は行われています。そして、核実験も堂々と行われています。

私達は、戦争を知らずに生きてきました。しかし、もっと戦争について学び、ビルマ人のように自然とも人間ともとけあって生きるような穏やかな心を持ち、我欲を捨て、もっと落ちついて深く考えられるようになり、平和を掲げていかなければならないと思いました。



## 「木のいのち 木のころ(天)」

5年 建築学科  
森木 史子

「木の命と人間の命の合作が本当の建築でっせ。」という作者の言葉が、私の心に深く残った。私は、この本を読むまで日本の建築、それを支える宮大工、そして木について気にも留めていなかった。四年生の研修旅行でたくさんの日本建築を見たが、なぜもっとしっかり見て触れておかなかったのだろう。あの頃の自分の軽率さを悔やみながら、この本を読んでいった。そして、たくさんのお話を教えてもらった。

まず、「木のいのち」のこと。木は大自然が生み育てた命で生きものである。人間が一人一人違うように、木も香り、触り心地、色など一本一本違うのだ。その木々を人間は思い通りにしようと思っているから、自然破壊になるのである。千年生きてきた木を使うのならその木の癖を見抜いて、それを生かし、少なくとも千年生きるようにするのは当然の義務である。実際に法隆寺も千三百年以上経っている。現在の建物はどうだろう。古くなれば壊して、その木を捨ててしまっている。そして、どんどん木を切っている。それで「自然を大切に」など言っているのだから私達は矛盾していると反省させられた。



## 夏の庭

3年 電子情報工学科  
松田 智恵

もし今、私の周りの大切な人が誰か一人でも死んでしまったらどうなるのだろう。そう考えた時、私はただ怖いと思うだけだった。だって、想像がつかない。動物が呼吸するように自然に、自分の日常に組み込まれているパーツがある日突然なくなるなんて、考えられない。だから死ぬことは怖いのだと、私は思ってきた。しかしこの物語を読んで、私の死ぬ事、また生きる事に対する考え方は、以前とは少し違った物になった様に感じられた。

「死んだ人は重たそうだった」という一人の少年の一言から、三人の少年は近所の一人暮らしの老夫を見張り始める。しかし、今にも死にそうだった老夫は、三人が見張りを始めるとだんだん元気になり、ついには三人と親しくなる。私は、見張られる事でどうして彼が元気になっていったのかわからなかった。しかし、それはもしかしたら恋愛のようなものかもしれないと思った。好きな人ができると自然と自分のことが気になるし、なんだか毎日が楽しい。彼の場合は、一人で少し淋しく暮らすことが彼の今までの「日常」だった。しかし三人と少しずつ言葉を交わすうち、彼らがいるということが、彼の「日常」に組み込まれていったのだと私は思う。だから、

そして、次に「宮大工」の素晴らしさも教わった。木の癖を見抜き、それを使うことができ、そのうえ日本の風土をよく理解し、それに耐える建造物を造っているのだ。子供の頃から修業をし、飛鳥時代の工人からの口伝を受け継いでいる。あまり世間に知られていない仕事だが、宮大工のおかげで、今でも法隆寺や薬師寺など古い建築に触れることができるのを私達は知っておかなければならない。そして、物いわぬ木とよく話し合っ、命ある建物に変えるのが大工の仕事であるということも知っておかなければならない。

時代の変化とともに教育のあり方も変わってきたが、宮大工の世界では、昔ながらの徒弟制を行っている。私は、古くさいやり方だと思っていたが、現代の教育と比べて、徒弟制が良いかもしれないと思い始めた。今の教育は、手取り足取り教えてもらえる。みんな同じ様に教えられる。それを頭だけで覚えていけばいいだけである。「考える」ということを今の子供達はしなくなったのではないだろうか。ところが徒弟制では、やって見せるだけである。あとは弟子が自分でやり方を考え、やってみて、うまく出来なければまた考える。そうやって手と頭で理解し、覚えていくのである。このように育てられてきた技術や知恵で、法隆寺や薬師寺などが数々の試練を受けながらも建っていられるのである。

素晴らしい日本の建築を素通りで見てきた自分を深く反省した。そして作者の「時代に生かされてもらっているんですから、自分のできる精一杯のことをするのが勤めですわ。」という言葉が胸に、これからの自分を考えていこうと思う。

三人がいるということで、彼の「日常」はだんだん明るいものになっていったのではないだろうか。また、誰かが自分の日常に組み込まれるということは、同時に自分もその誰かの日常に組み込まれていくということにほかならない。三人が老夫をいつもどこかで思っていたように、彼も三人のことをいつか気にかけるようになっていく。しかし、お互いがいるという事がお互いの日常となってからしばらくすると、老夫は死んでしまう。初めは悲しむばかりだった三人も、彼を心の中に住まわせながら、それぞれの道を歩いていく。

私が彼らの立場であつたら、彼らのように、一人の人間の死という事実に正面から向き合い、顔を上げて歩いて行けるだろうか。そう考えると、やはりうまくはできないと思う。でも、怖いとは思わなくなった。私が本当に怖いと思っていたのは死ぬ事ではない。死んだ後皆が悲しむのが想像できる事が怖いのだ。自分が死んだら、と考えると分かり易いと思う。また同時に、誰かが消え去っても時間は確実に流れるのだと思うと、それも怖い。何もなかったように世界は動き続けるのかと思うと、なんだかたまらない気持ちになる。それはきっと私だけではないと思う。皆そうだと思う。しかし、ここで怖いと思いつけるか、三人のように前進できるようになるかは、時間をいかに大事に使うかだと思う。怖い事はやはり怖いけれど、そこから目をそらすのではなく、それに立ち向かって行けるように、毎日を一生懸命生きなくてはならないと、私は思った。

## 審査を終えて

### 一般教育科 焼山 廣志

「読書感想文」とはどういうものを指すのか、それによって評価の観点も異なってくると思うのですが、私は、その感想の中に書物と、読者自ら（＝感想文の著者）との具体的な関わり、投影等の言及がなされているべきだと、又、そうした作品を評価したいと考えました。今年は、例年の、名作といわれる文学作品よりも、今の話題作を扱った「少年H」「夏の庭」の感想を述べた作品が多くノミネートされた所に特徴があったように思います。

又「死」「老」といった大きなテーマに潔いけどんだ作品が多かったのも印象深かったです。

### 一般教育科 岩本 晃代

入賞作品には自分らしい伸びやかな文章がつけられていて、印象的でした。難しい言い回しを無理にする必要はないのです。感動を自分の言葉で素直に表現してみましょう。そして何度も推敲することが大切です。

来年度も、多くの個性豊かな感想文に出会えることを期待しています。特に上級生は下級生の手本となるよう積極的に参加して下さい。

### 一般教育科 山口 英一

今年は昨年に比べて対象とした本に広がりが見えたと思います。課題図書50冊のリストを見直して一部を新しいものに切り替えたことも一因でしょうが、学生諸君が自分の興味で題材となる本を選んでくれた結果ではないでしょうか。ここに掲載された感想文を読んで、興味を持ったらぜひ自分でもその本を読んでみてください。

### 一般教育科 中本 潔

「高瀬舟」や「地獄変」のような毎年の常連の作品群の中にあって、「少年H」や「夏の庭」のような現在話題になっている書物についての感想の方が新鮮さがあり、好感が持てた。「夏の庭」を読んで書いたものが多く、しかもいい作品が目だって、若い世代が「死」

とか「老い」とかのおおきなテーマに関心があるのか、と強い印象を受けた。「月と六ペンス」のような外国文学の長編について書いたものに優れた作品があったのも嬉しい。ただ全般的な印象としては、昨年の作品の方が質が高かったような気がする。最後に一つ、誤字をなくすこと。

### 一般教育科 瀬戸 洋

ここ数年、感想文を読んでいて、感想文の対象のほとんどが短編で占められているのを残念に思っています。夏休みには夏休みでしか読めない本を読んだらどうだろう。例えば、ドストエフスキーやトルストイの長編を。図書館には君たちの挑戦を待っている本がたくさん並んでいます。来年は青春の思い出にそういう大長編に勇猛果敢に挑戦する人が一人でも出現することを期待しています。

### 電気工学科 小澤 賢治

普段は文学作品をあまり読まないもので、皆さんの感想文を読んで本を読むことはいいなと改めて思いました。これを機に自分でも新しい分野の本に目を向けてみたいと思います。また私の場合は、最近ではコンピュータを使うようになったせいで手で字を書く機会が減っています。そのためか漢字を忘れてたりもしますが、感想文を読んでいて学生諸君の誤字が多いのが気になりました。

### 建築学科 原田 克身

私が読書感想文の審査委員をしたのは27年間の教官生活で初めての事です。50数編の読書感想文を3回程読んで選出しました。他の先生ととてつもなく異なると困るなあと思っていましたが、蓋を開けて安心した次第です。苦勞したことは、クラス選出です。良いのは決まるが、あと数編選ぶのに皆同レベルに思えてとうとう多めに選出し審査委員の先生方に迷惑をかけました。少し残念だったのは、字が乱雑で、簡単な漢字の間違ひのある作品があったことです。

## スタッフ紹介

### ◆平成11年度 図書館運営委員

委員長	中本 潔	(図書館長)
委員	村岡 良紀	(図書館主任)
〃	田口 紘一	(教務主事)
〃	(田口 紘一)	(機械工学科)
〃	小澤 賢治	(電気工学科)
〃	石井康太郎	(電子情報工学科)
〃	正留 隆	(物質工学科)
〃	原田 克身	(建築学科)
〃	山口 英一	(一般教育科・文)
〃	(村岡 良紀)	(一般教育科・理)
〃	井上 勝敏	(庶務課長)

### ◆図書館報編集委員

委員長	山口 英一	(一般教育科・文)
委員	石井康太郎	(電子情報工学科)
〃	正留 隆	(物質工学科)
〃	昌子 喜信	(図書係長)
〃	宮本美沙子	(司書)

### ◆図書館倶楽部編集委員

顧問教官	焼山 廣志	(一般教育科・文)
委員長	西田 智美	(物質工学科4年)
委員	近藤 洋平	(電気工学科3年)
〃	前田 圭子	(建築学科3年)
〃	友岡 康祐	(機械工学科2年)
〃	月岡明菜美	(建築学科2年)
〃	西川 美耶	(建築学科2年)

### ◆事務部

庶務課長	井上 勝敏
図書係長	昌子 喜信
司書	宮本美沙子
〃	戸上 清子

### ◆夜間・土曜日開館職員

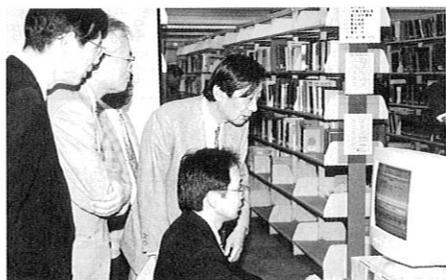
事務補佐員	平山 智子	
〃	川内美奈子	(物質工学科4年)
〃	西田 智美	(物質工学科4年)
〃	田中 紀子	(建築学科4年)
〃	中尾明日美	(建築学科4年)

# 図書館の一年

1999.4

## 新図書館システムの披露式を開催

昨年11月から導入の準備を行っていた図書館の新しいコンピュータシステムが4月から本稼動し、学内外の関係者に対してお披露目が行われました。新しいシステムでは、インターネットを介して学内外のパソコンから本校の蔵書検索ができるようになるなど、利用者サービスが格段に向上しました。



1999.4~5

## 新入生オリエンテーション/クラス別OPAC検索(蔵書検索)指導を実施

入学式後に、新入生を対象にした図書館利用についてのオリエンテーションが行われました。また、クラス毎にOPAC検索(蔵書検索)指導が情報処理センター演習室において実施され、新入生達は本校図書館の蔵書検索の方法を実習しました。

1999.9

## 九州地区国立工業高等専門学校図書館長等協議会を開催

隔年で開催されるこの会議が、今年は本校を担当校として、2日間にわたりオオムタガーデンホテルで開催されました。最近の高専図書館をめぐる諸問題について、九州地区の各高専図書館長による活発な意見交換が行われ、有意義な会議となりました。



1999.9

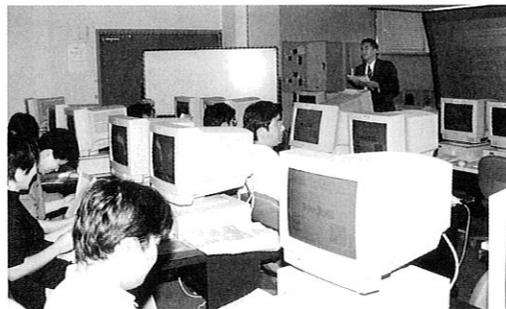
## 図書の遡及入力を開始

書庫に所蔵される約22,000冊の図書の内、比較的新しい8,000冊を対象に遡及入力を開始しました。これにより、書庫内の蔵書も少しずつ検索できるようになってきています。

1999.10~11

## データベース利用講習会を開催

各種のデータベースについて理解を深めてもらう目的で、本校教官を対象に2回にわたってデータベース利用講習会を情報処理センター演習室において開催しました。第1回目は、科学技術振興事業団(JICST)が提供するJOISとSTN Internationalの講習会を行い、第2回目は、長岡技術科学大学が提供する外国雑誌目次データベースの講習会を行いました。2回合わせて18名の教職員が受講しました。



1999.10

## 全国図書館大会に参加

滋賀県大津市で3日間にわたり開催された、第85回全国図書館大会に本校図書館から、中本図書館長と司書の宮本さん、戸上さんの3名が参加してきました。それぞれ「短大・高専図書館分科会」、「図書館の自由分科会」、「図書館利用教育分科会」の3つの分科会に別れて参加し、全国の館種をこえた図書館員と交流を深めるとともに、図書館界で今問題になっているホットな情報に接することができ、意義ある大会となりました。

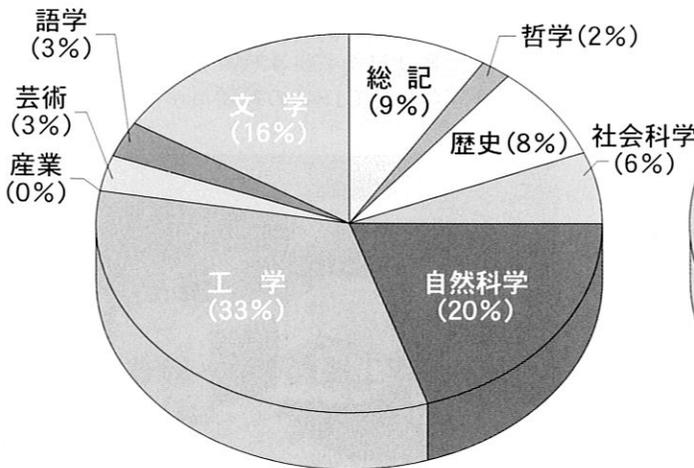
# 図書館統計

## 1. 蔵書統計

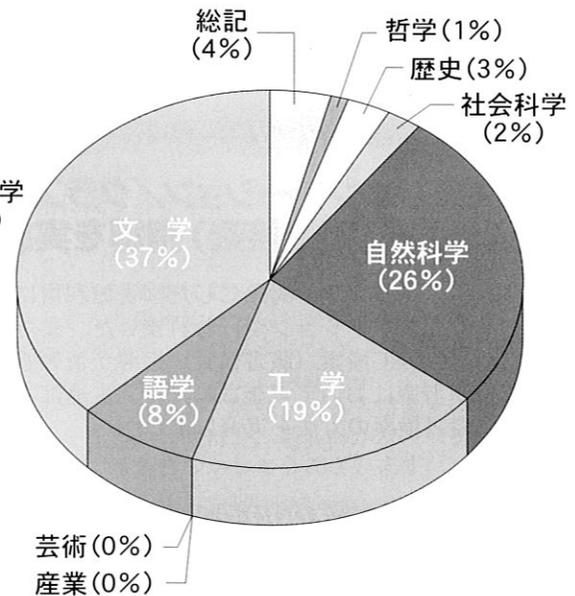
### 蔵書構成

分類	000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計	
	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学		
図書 の 冊 数	和	5,391	1,600	5,045	3,897	12,463	20,480	274	1,970	1,758	10,324	63,202
	洋	278	48	203	134	1,862	1,374	3	28	552	2,784	7,266
	計	5,669	1,648	5,248	4,031	14,325	21,854	277	1,998	2,310	13,108	70,468
雑誌の 種類	和	16	2	2	5	19	82	0	14	9	9	158
	洋	1	1	4	2	4	22	0	0	2	2	38
	計	17	3	6	7	23	104	0	14	11	11	196

図書分類別蔵書割合「和書」



図書分類別蔵書割合「洋書」



## 2. 平成10年度利用状況

開館日数 274日

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計	
開館日数	22	24	25	25	16	24	25	23	22	23	23	22	274	
入館者数	総数	5,359	7,276	10,143	8,096	2,506	7,243	7,914	6,197	8,317	5,981	8,721	4,013	81,766
	(内夜間)	(561)	(1,174)	(1,281)	(779)	(0)	(980)	(827)	(996)	(930)	(828)	(1,326)	(115)	(9,797)
	(内土曜日)	(61)	(318)	(414)	(214)	(0)	(266)	(286)	(297)	(224)	(194)	(283)	(0)	(2,557)
	1日平均	243.6	303.2	405.7	323.8	156.6	301.8	316.6	269.4	378.0	260.0	379.2	182.4	298.4
貸出冊数	総数	452	737	732	491	105	487	462	612	598	516	698	69	5,959
	(内夜間)	(84)	(176)	(143)	(85)	(0)	(129)	(109)	(149)	(96)	(122)	(160)	(7)	(1,260)
	(内土曜日)	(14)	(62)	(54)	(33)	(0)	(35)	(42)	(47)	(32)	(52)	(59)	(0)	(430)
	1日平均	20.5	30.7	29.3	19.6	6.6	20.3	18.5	26.6	27.2	22.4	30.3	3.1	21.7

### 3. 過去5年間の利用状況の推移

分類別図書貸出冊数

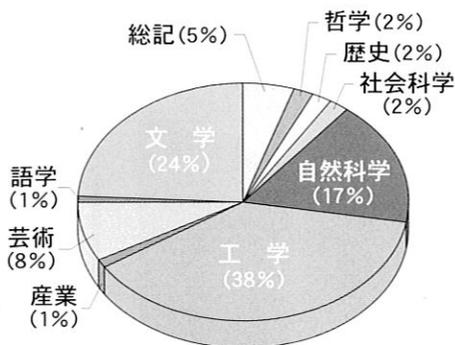
年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	合計
平成6年度	143	60	49	47	706	1,979	8	390	50	815	4,247
平成7年度	197	118	195	128	851	2,289	15	696	86	1,668	6,243
平成8年度	215	125	235	264	1,141	1,992	100	530	57	1,720	6,379
平成9年度	310	112	97	106	896	1,926	68	412	57	1,111	5,095
平成10年度	625	93	111	78	1,073	2,327	96	347	88	1,253	5,959
平均	298	102	137	125	933	2,103	57	475	68	1,313	5,585

利用状況

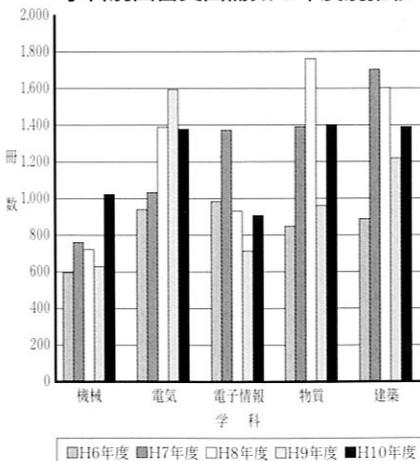
年度	利用者数 (内学外利用者)*	開館日数	入館者総数 (内夜間・土曜日)(内学外利用者)*	貸出冊数総数 (内夜間・土曜日)(内学外利用者)*	一日当り 入館者数	一日当り 貸出冊数	一人当り 貸出冊数
平成6年度	1,192(-)	238	69,974 (4,876)(-)	4,247 (1,020)(-)	294	17.8	3.6
平成7年度	1,220(-)	240	73,384 (5,900)(-)	6,243 (1,616)(-)	306	26.0	5.1
平成8年度	1,225(-)	244	62,730 (9,380)(-)	6,379 (1,865)(-)	257	26.1	5.2
平成9年度	1,254(38)	277	74,665 (10,717)(98)	5,095 (1,424)(194)	270	18.4	4.1
平成10年度	1,236(51)	274	81,766 (12,354)(43)	5,959 (1,690)(105)	298	21.7	4.8

\*平成9年度から一般市民への開放を開始した。

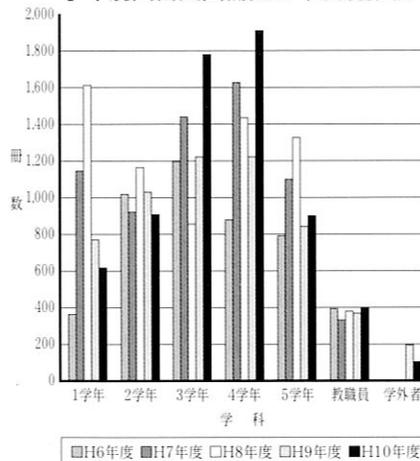
分類別貸出冊数割合  
(平成6～10年度平均)



学科別図書貸出冊数の年度別推移

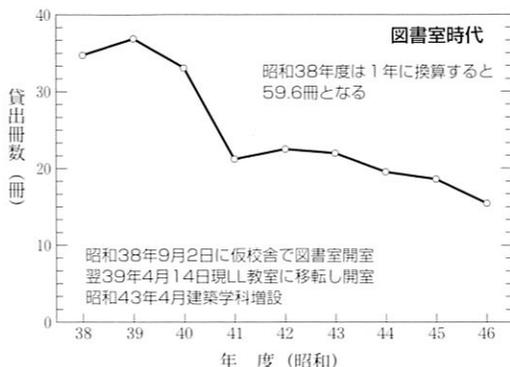


学年別図書貸出冊数の年度別推移

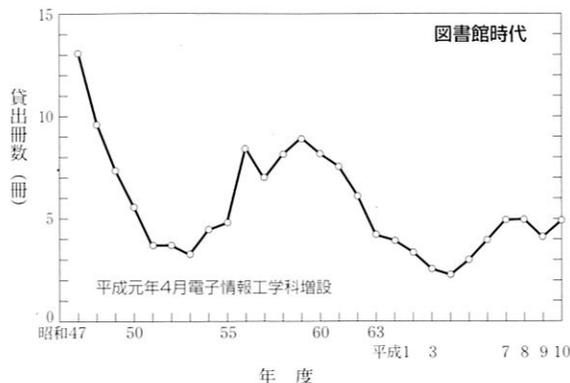


### 4. 創設時からの一人当たり貸出冊数の推移

一人当たり年間貸出冊数



一人当たり年間貸出冊数



# 郷土の文化財

## 重要文化財

### 高良大社本殿・幣殿・拝殿 寛文元年(1661) 久留米市御井町

高良大社は久留米市の東南、高良山の中腹に在ります。北西を正面として、眼下には筑後平野が広がっています。

神社の歴史は古く、平安時代には高良玉垂命神社として朝廷にも認識されていました。祭神は主神の高良玉垂命と八幡大神・住吉大神の三神です。かつて、山内には数多くの仏堂があり、仏教との結び付きが強い神社でした。

現在の社殿は3代久留米藩主有馬頼利の造営によるもので、寛文元年(1661)に完成し、深谷平三郎が棟梁として従事しています。社殿の形式は日光東照宮(栃木県)と同じ権現造で、入母屋造の拝殿と本殿とを両下造の幣殿で繋ぎ、棟がH型に配られています。屋根は薄い板で葺いた柿葺です。

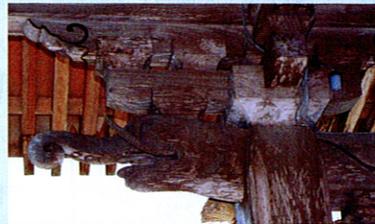
拝殿は正面の向拝に唐破風を付け、屋根に千鳥破風をのせています。幣殿は一段床を低く張り、畳を敷きしています。拝殿・幣殿の格天井の格間には絵を描いています。本殿は拝殿・幣殿よりも高いところに建っています。内部は前後二室に別れ、手前には畳を敷き、後方に3神を祀っています。

組物は二手先出組で、中備えの墓股には様々な浮彫があり、彩色を施しています。拝殿と本殿の腰組には三手先出組を用いています。

重文指定の権現造は全国に十数棟しかなく、九州には当社しかなく、貴重な建築です。他の権現造よりも控え目な装飾は地域性を表しているのでしょうか。(建築学科 松岡高弘)



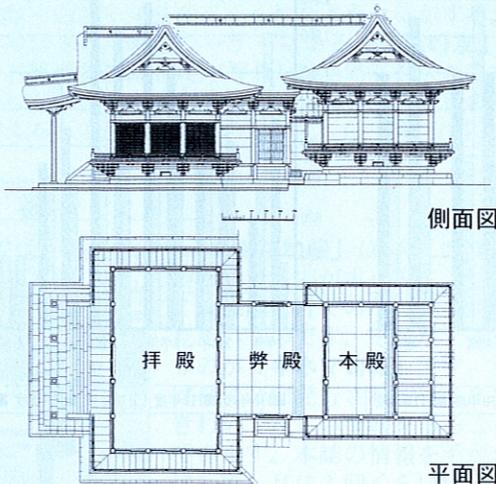
拝殿内部 幣殿との境



向拝木鼻の象



正側面全景



## 編集後記

表紙は建築学科松岡先生による大牟田・荒尾に残る三池炭鉱関係遺構の写真です。前世紀末からこの地の繁栄を支えてきた石炭産業も、時代の流れの中で歴史上のものになってしまいました。今回の特集で取り上げた「雑誌」は、一般の書籍に比べるとその情報の寿命は短いでしょうが、その内容は(たとえ専門分野のものであっても)時代の空気を大きく反映しています。並んだ雑誌の写真がそれを証明してくれるでしょう。ちょっと前に流行った表現をす

るなら、雑誌とは現代社会の表層を多様な切り口で見せてくれる装置です。次に図書館のゲートをくぐった時には、右手に曲がってちょっと立ち止まってみて下さい。今まで気づかなかったものに、急に興味を引かれるかもしれません。その「思いがけない出会い」が一生のつき合いになるかもしれません。図書館の雑誌コーナーはそんな出会いの場です。改めて表紙の写真を眺めると、当時の「今」が見えてきませんか。